

---

## 16. 壺屋やちむん通り街並みづくりの実験パート2

壺屋の通りを考える会  
(沖縄県那覇市)

---

### I. 活動の背景と目的

那覇市壺屋は、やちむん(焼き物)をつくる陶工たちが住み、働いてきたまちである。国際通りまで歩いて数分という場所にもかかわらず、ガジュマルの緑や石垣、スージー(路地)、赤瓦の木造家屋といった沖縄の伝統的な集落を思わせる風景が残っている。壺屋やちむん通りは、ゆるやかなS字のカーブを描く壺屋のメインストリートである。400メートル程の通りの両側には壺屋焼きの陶器を売る店が並んでいる。

「壺屋の通りを考える会」(以下、考える会)は、このやちむん通りをコミュニティ道路として整備する計画が持ち上がった際、道路整備のあり方を住民自身が考えるために設立された組織である。1996年秋に3回のワークショップを開催、やちむん通りを現代的な石畳道とする住民案をまとめて那覇市に提案した。この案はほぼそのままのかたちで市の基本設計案となり、沖縄県内で初めて住民が主体となった道づくりが実現することになった。

翌97年度に道路事業が正式にスタート、考える会は、道路本体にあわせて沿道のまちづくりを進めようと、(財)まちづくり市民財団の助成を受け「街並みづくりの実験・パート1」として、木や鉄や陶器を使ったモデル的な看板整備を行った。

引き続き、98年度は、沿道店舗のモデル的修景整備を企画、(財)ハウジングアンドコミュニティ財団の助成を受けることになった。「街並みづくりの実験パート2」と銘打ったこのプロジェクトでも、パート1と同様、モデル店舗が1/2助成金、1/2店舗負担で、新しく整備される石畳道と調和する修景工事を実際に行うもので、その主旨は限られた予算でどの程度の修景が可能なのか、どんな整備が適切なのかを検討してみるというものである。

### II. 活動内容

モデル店舗の選定については、修景工事を実際に行える条件(土地建物所有者の承諾、資金、改修の意志等)が整った3店舗とした。修景工事は、植栽工事の一部を除き、1998年8月～9月に実施した。

#### (1) 育陶園修景工事

育陶園は、窯元の一つで、やちむん通り沿いに元々スーパーと倉庫だった建物を所有している。通り沿いでは数少ない店舗前にスペースを有する建物で、歩道空間とあわせた整備が可能な場所であること、鉄筋コンクリート造をどのように修景したらよいかという今後の沿道建替の参考となる事例であることなどの理由から、改修の話を持ちかけたところ、ローコストでできるならやりたい、という意向でモデル店舗に選ばれた。

予算は100万円で、うち50万円を助成金、50万円を店舗に負担してもらったものとした。修景のポイントは、次の3つである。

①建物前面の空地を歩道と一体的に整備し、ゆとりのある歩行者空間を提供してもらう。

具体的には、歩道と同面同素材(リサイクルストーン角石張りびしゃん仕上げ)で仕上げ、高木を配して日陰をつくり、ベンチを置いて、セミ・パブリック的な空間づくりに協



育陶園修景前



修景後

力してもらう。

### ②主として緑で修景する。

やちむん通りの東側半分は緑が少なく、緑が欲しいという要望が道づくりの段階から出ていた。しかし、道路幅員が6メートル程度と狭く、街路樹を植えるのにそぐわないため、沿道側でできるだけ緑を確保していこうというのが道づくりの際の結論であった。そこで、育陶園は、高木（ハウオウボク）やパーゴラ（プーゲンベリア）などの緑をできるだけ採り入れることにした。

緑以外では、赤瓦の色彩と調和するサーモンピンクの壁面塗装、既存木造庇への赤瓦設置、シーサーの壁面設置及びライトアップなどを行っている。

### ③ローコストで修景する。

育陶園は、若い職人を多数抱える窯元であるため、施工業者まかせにせず、できる部分については作業に協力してもらうことで、できるだけコストを落とすことにした。

また、ファサードの塗装は塗装業者にあまっていた吹き付け用の塗料を無料で分けしてもらい、これを下地として質感を出した後、ペンキで仕上げる仕様とした。

植栽については、那覇市土木部長の協力により、市で持っている高木を植樹してもらうことができた。

壁面のシーサーは、育陶園の主力商品で、自社製品である。

## (2) 新垣製陶所修景工事

新垣製陶所は、古くから壺屋にある窯元のひとつで、上焼き（釉薬をかけて焼く絵付けの陶器）で知られる。従来は、やちむん通り沿いの木造家屋を借りて店舗としてきたが、新たにやちむん通り沿いの土地建物を購入し、店舗を増やすことになった。

新店舗では、既存の鉄筋コンクリート造建物を改修して新垣製陶所（兄・姉）と新垣陶苑（弟）の2店舗が1階で営業し、2階以上を倉庫として利用することになり、設計業務は浦添市の門都市建築研究所・金城優氏が担当した。

考える会では、新垣製陶所及び金城氏と調整し、赤瓦屋根の設置及び店舗前土間床のリサイクルストーン仕上げの2つの修景について50万円を助成することを決めた。

## (3) 壺屋陶器事業協同組合前修景工事

壺屋陶器事業協同組合は、壺屋焼きに従事する25の窯元からなる組合で、陶土の生産や陶器の販売を行っている。やちむん通り沿い、前述の育陶園、新垣製陶所新店舗のほぼ道向かいに、組合事務所と組合店舗のある「壺屋陶器会館」がある。この敷地は、隣接する

拝所とともに字有地である。

拝所については、ガジュマルの木と井戸があり、やちむん通りに面しては高さ30センチ程度の花壇となっていた。考える会が道づくりの検討を行った際、やちむん通りには屋外で座って休息できる場所がないこと、植栽が多すぎてガジュマルの景観が活かされていないことなどが問題提議されていた。

また、組合店舗前の階段については、コンクリート仕上げで、石畳と景観上調和しないので何とかできないか、という声が考える会にあがってきた。

そこで、育陶園、新垣製陶所と同時に、組合～拝所前を修景整備することにした。

まず、拝所前については、既存の低い花壇を撤去し、やちむん通り歩道と同じリサイクルストーン角石張りとした上で、ベンチを設置した。組合店舗前についても、コンクリート階段をリサイクルストーン角石張りとした。また、車椅子利用者のための簡易設置型のスロープを別予算で製作した。

拝所前は、ベンチを設置して以来、ほとんど毎日、観光客や地元の住民が座る休憩場所になっている。ちょうど後ろのガジュマルが強い陽射しを遮ってくれるので、夏の日中も快適である。

なお、組合前修景工事については、字有地であり、公的性格の強い施設の整備であることから、全額を助成金で負担し、不足分は（財）まちづくり市民財団の助成金から補った。



拝所前のベンチ  
いつも誰かが座っている

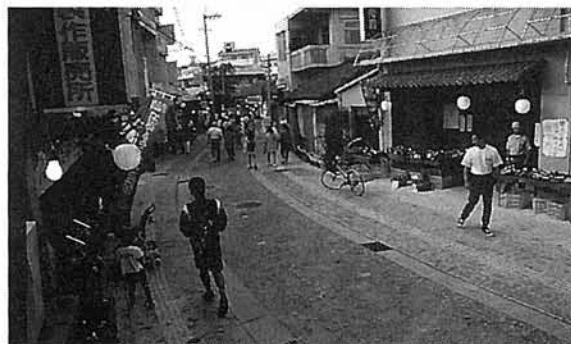
### III. 活動の効果及び今後の課題

昨年頃から、やちむん通り沿いの木造家屋の建替の話がいくつか出てきている。建替後はRC造になるが、RC造でもいろいろな工夫をすることで、多大な費用をかけずに街並みづくりに貢献できるという具体的な事例を提供できた。特に、緑を植える際、那覇市等の公的支援が得られることもわかり、沿道で少しでも高木を植え、緑陰を提供するケースが出てくることを期待している（これまで、建替後に1階部分がピロティ駐車場になって街の連続性が損なわれた事例があった）。

今後の短期的課題は、歩行者天国の定期的実施や壺屋からの情報発信など、より多くの人々に壺屋を楽しんでもらうためのソフトな工夫である。2月14日に行われた石畳完成記

念の歩行者天国は、様々な催しもあってたくさんの人で賑わった。

また、昨年考える会は、スージ（路地）の散策ルート整備の提案を那覇市に行ったが、長期的課題としては、線で始まった道づくりを面のまちづくりに広げていくことがあげられる。ただし、長期的なまちづくりの取り組みに向けては、改めて組織のあり方を考えていく必要がある。



壺屋の新しい石畳と修景された店舗